

「無知の知」と連携



西村 泰弘*

東日本大震災から1年が経ち、復旧から復興へ舵を切り始めている。一方、今回の被災を踏まえ、各方面で反省や自戒の弁が述べられている。昨年3月23日には、土木学会、地盤工学会、日本都市計画学会の会長名で「我々が想定外という言葉を使うとき、専門家としての言い訳や弁解であってはならない。このような巨大地震に対しては、先人がなされたように、自然の驚異に畏れの念を持ち、ハードのみならずソフトも組み合わせた対応という視点が重要であることを、改めて確認すべきである。」という緊急声明が発表された。大震災以降、「想定外」という言葉を安易に使うことへの反省とともに、技術とは何かが問われ、技術の限界を知りそれを補う技術や仕組みなどが論議されている。

哲学の祖といわれるソクラテスは、「知らないのに知っていると思う者よりも、自分が知らないことを知っているという者の方が優れている」と言っている。これを「無知の知」と言うが、すべての事を知ることの難しさと自分の限界を知ることの大切さを教えている。

最近、光よりも速い物質の存在や火星に液体の水が発見されたというニュースが流れた。これまでの理論や常識を覆す発見が続いている。未だ確証されていないもの、間違っているかもしれないものもあるが、我々が常識や真理と思っていることは、あくまでも我々の知識や発見からである。何か新発見があれば、覆されていくことは当然である。今から2500年も前の哲学者からも、人の知識の限界は示されていた。人間の知りうる限界を認識し、これを補う方法を考え出すことが、人間の知恵である。東日本大震災と原発事故を受けて、過去の歴史を顧みる研究も評価され、また多様な意見を受け入れることや異分野との連携の必要性が叫ばれている。

「匠の手」と言われる脳血管手術の権威である旭川赤十字病院の上山博康先生は、「自分の限界を知っていて、患者にとって何が大切かを考えることができる医師が本当の名医」と言っている。他の医師が見放した患者にも手を差し延べ、手術の難しさやリスクを真正面に説明し、自分は誠心誠意、最大限に力を出して

立ち向かうことを伝えると言う。絶対に大丈夫ということはないことを知りつつ、人の命を助けるために何ができるかに最大の力を注ぐ。しかし、神ではなく人が為すことであるから、成し遂げられないことがあるかもしれない。自分ができることを最大限に為し、妥協を許さない行為は、尊敬とともに教えられる。

土木工学とは何か。我々、土木工学の技術者、研究者は、医者とは違うが、人の生活を支える事業を担う立場である。人や社会に役立つために、何をしなければならぬかを考え、それを実行していく役割を担っている。今回の大震災を経験し、改めてその重要性を認識し、謙虚にそして真摯に様々なことに取り組んでいかなければならない。

公共事業の減少による建設業の厳しさが言われる中、最近、ゼネコン各社が異業種と連携する動きが相次いでいる。通信技術やIT技術、ロボット技術などの異分野産業と連携し、新たな発想や技術開発のスピードアップを狙い、市場の拡大や新規分野への参入などを図っている。大学や研究機関でも、他分野との連携を模索しているところが増えている。

寒地土研でも、平成22年度から23年度にかけて、北海道立総合研究機構をはじめとして室蘭工業大学、北海道大学工学研究院、北見工業大学、そして北海道開発局、北海道建設部、札幌市、釧路市、日本技術士会北海道本部と研究または技術協力・連携の協定を結び、研究開発の向上・拡大とともに、地域の技術力向上や災害時の技術支援に貢献することを目指している。

寒地土研が内務省北海道庁の土木試験室として昭和12年8月に発足して、今年で75年を迎える。この間、組織の変遷とともに様々な研究開発に取り組みながら、北海道開発に多大な貢献をしてきた。これまで培った実績や成果を活かし、また他機関や他分野と協力・連携しながら、北海道だけではなく積雪寒冷地をはじめとした我が国にどう貢献していくのか。また、寒地土木技術の先端的・先駆的な研究機関として、世界にどう貢献していくのか。我々の使命は大きいと考える。